特集用・宮崎会員の随想「忘れ得ぬ労使の人々」第３４話・
思い出される学者の群像Ⅰ

尊敬する佐瀬昌盛先生が今年の２月 24 日に逝去されたことを読売新聞で知った。ショックである。長い間先生の警咳に接してきたし年賀状のやり取りを重ねてきたが、今年は先生から音沙汰なく気にかかっていた矢先である。
俄かに先生との交流が思い出された。最初の出会いは遥か昔のことで記憶が薄れてしまったが、生産性の船で韓国や中国へご一緒したり、主宰する勉強会に講師をお願いし、いつも快諾頂いてきた。
先生は中国の大連生まれであるが私も大連生まれである。大連へご一緒し旅順や水師営などの戦跡巡りをした。この時の先生は生まれ故郷を訪れた興奮だろうか、ひっきりなしに話しかけてこられ饒舌であった。

正論大賞を得て挨拶する佐瀬先生

ある時産経新聞社から「正論大賞」受賞式典のお招きを受けた。当年度の受賞者は佐瀬先生で、頂いた案内は先生の推薦によるものであった。
石破茂前首相は防衛お宅とささやかれるほど防衛問題に精通しておられた。佐瀬先生の防衛に関する著書を表紙がめくれるほど読み込んで勉強されたと伺った事がある。
先生はかつて成蹊大学で教鞭をとったことがあるがその時の教え子に安倍元首相がおられた。
講演会に安倍氏を迎えた折先生にも同席していただいたが、控室で先生は安倍氏に向かって私を覚えているかと問うと、安倍元首相は「はい。学生時代はよく叱られました」と笑いながら応えた。
佐瀬先生は防大教授の後、日本の安全保障を論じる研究者の集まりである安全保障問題研究会を主宰されたが、ロシア問題の第一人者である青山学院大学の袴田茂樹教授に後任を託し退かれた。安保研は毎月我が国の安全保障問題を中心とした研究論文を発行しているが先生は亡くなるその日まで欠かさずご自身の思いを月間リポートに綴っておられた。
学者然とした学者がまた一人旅立ってしまった。思い出は際限もなく湧いてくるが、今は切なくも佐瀬先生のご冥福を祈るばかりである。

学者で忘れられない方は多いが風格のある中西寅雄先生は格別である。中西先生は東大・阪大・慶応義塾大の教授を務められた経営学の大御所である。
慶應大学教授の時に日本生産性本部の野田信夫氏の後任として、生産性研究所長を引き受けられた。
先生は産業界からの要請を受けて経営の大学院ともいうべき「経営アカデミー」を創設され多くの学者を動員しカリキュラムを編成した。先生は経営学の大ボス的存在であり、私は先生の下に配属されお陰で多くの研究者と交流を重ねてこられた。

中西先生に話しかけられ

談笑する中西寅雄先生右と横山保先生

日本はかつて政治・経済・学界いずれの分野にもボス的存在の大物と目される方がいたが時代の流れであろうか最近は
一目置かれる人物がどの分野からも失せてしまったように感じている。

中西先生の東大教授時代のゼミには日本銀行の佐々木直総裁がいた。まだ20代の頃先生のお使いで佐々木日銀総裁にお会いしひどく緊張した。東北大学の鍋島達教授も中西先生の東大時代のゼミ生である。鍋島先生は中西先生の若かりし頃のことをよく語っていたが忘れられないエピソードがある。
中西先生は病的なほど、たばこ好きでチエンスモーカーである。東大時代ゼミ生が先生に大きなガラスの灰皿をプレゼントしたところ、火の付いたままのたばこの吸い殻が山となりガラスの灰皿が熱で割れたというすさまじい話である。
銀座に田屋という高級ブランドの紳士洋品を扱う老舗があるが中西先生の縁戚である。
身に纏うものは田屋ブランで先生はとてもダンディーだった。当時裏地が真っ赤なコートを着ていたが、煙草で焦がしたのであろう高価で立派なコートに２つ３つと焼け焦げの穴があったがこれがまた格好良く見えたものである。
中西先生は学者の頂点におられ経営アカデミーに関係する多くの学者が尊敬をもって接していた。先生は「何は元気か」「何はどうなっている」「あれは何している」と主語を省略して話す癖を持っていた。普段接している人は話の流れで見当はつくものの、ともすると戸惑うことが多かった。
先生に私の結婚式に出て頂き来賓挨拶をお願いした。「何は先ごろアメリカから帰ってきました。何には何を頼んでいたが報告を聞いてなかなかよくやった・・・・・」というご挨拶を頂き私は感動したが列席者の多くは何のことか戸惑いを隠し切れなかった。
中西先生は釣りが趣味で私も釣りにのめり込んでいた。秘書から「所長がお呼びです」と連絡がくる。大抵は釣り談義である。中西家のご実家は和歌山県の由緒ある名家である。和歌山はタイ釣りの名人が数多く、房総の大原は今もタイ釣りのメッカとして有名であるが、大原沖の漁場は和歌山の漁師が見つけ大原の地に定住したと聞いている。中西先生は大原の船頭衆には尊敬をもって迎えられていた。先生からは時々釣竿をプレゼントされ釣り仲間からは大層羨ましがられたものである。
よく叱られたが一度だけ先生に詫びられたことがある。私の従弟が慶大で先生のゼミを受けたいというので安請け合いし、先生にお願いに行くと従弟の名前をメモし「わかった了解した」といわれた。
ところが従弟から連絡があり、発表された名簿に名前がないというのである。先生に伺うと「すまない。実は１００名を超える応募があり仕方なく籤引きにしたのだ。籤運が無かったと諦めてくれ。誠に相済まない」と深々と頭を下げられたのである。

産業界に名の知れた売れっ子の某教授がカリキュラム編成にクレームをつけてこられた。中西先生に報告すると「あの小僧っ子が・・・」と呟いたのである。有名な学者をつかまえ小僧っ子扱いするので思わず先生の顔をみてしまった。先生の目は憎しみでなく、にこやかな慈愛に満ちた目で安心した。

東京大学の諸井勝之助先生には助教授時代から長いお付き合いを頂いてきた。先生は経済学部で会計学を教えていた。
諸井家は華麗なる一族である。先生の義父は秩父セメント（現太平洋セメント）の社長会長を務めた日本を代表する財界の大物諸井貫一氏である。貫一氏は東大の講師を経て、日経連、経団連の創設に尽力し、日経連の初代会長を務めた人である。諸井貫一氏は後に財界の論客として名を馳せた諸井虔氏に秩父セメント社長の座を譲った。
諸井勝之助先生ご自身は、渋沢栄一の曽孫であり諸井家に婿養子に迎えらえられ学問に生涯をささげた。
本郷の旧真砂町に居を構える諸井邸は、武家屋敷の趣を持った堂々たる屋敷である。
余談ながら泉鏡花の小説「婦系図」に出てくる真砂町の先生とは諸井勝之助先生の義父の諸井貫一氏がモデルではないかとひそかに今でも思っているのであるが・・・・。

左諸井勝之助先生と下田東急ホテルにて

東大の経済学部研究室や真砂町のご自宅にしばしばお邪魔したものである。東大で先生と研究室が隣り合った宮下藤太郎先生や津曲直躬先生を交え、時を忘れ懇談したこともあるが振り返ると諸井先生は極めて真面目な方で、大抵は学問の話題であったと記憶している。

宮下先生は若くして東大助教授となった経営学者で、日本生産性本部が編成したトップミッションに新進気鋭の学者として加わってアメリカへ随行した。当時石原慎太郎氏が颯爽と文壇にデビューした頃で、前髪に特徴のあるラフな髪形は世間の耳目を集め「慎太郎刈り」と評判をとった。
宮下先生はいち早く慎太郎刈りをして並み居る人々を驚かせ話題となったものである。
また論文を書くことを厭い東大の定年近くまで書こうとしなかった。

右宮下藤太郎先生

東大の教授会の序列は教授・助教授の順列が厳しく守られていた。宮下先生の教え子である中村貢先生が教授となり席次では宮下先生がその下に位置することとなり見かねた学部長が「頼むから論文を書いてくれ！」と頭を下げ懇願したときいている。
話が横道にそれたが諸井先生は生真面目な方で、卑近な言い方が許されるならば冗談が通じにくい学者であった。

文部省から派遣されイギリスへ留学した。当時東大紛争下で大荒れの時代であったが新聞のキリ抜きや耳に入る情報をしたため、現在のようにＥメールなどない時代であったので、しばしば航空便を送った。
アメリカ経由で帰国した先生から電話をもらった。二日前に帰国したと言われ自宅に招かれた。応接間のテーブルにいい香りの新鮮な大きなパイナップルが運ばれてきた。まだ日本では缶詰以外手に入りにくい果物で大層珍しく頂いた。
四方山話で、大方の研究者がアメリカを選ぶのになぜイギリスを選んだのかと尋ねると「イギリスは伝統や歴史が今に息づき大切にする国だから」と真に先生らしい答が返ってきた。
先生と旅行を何度かした。当時は携帯電話などない時代でホテルに到着すると必ず公衆電話から自宅に電話を入れる。相手は夫人である。先生は敬語で夫人と話しをしている。私は自分の連れ合いと話すのに何で敬語を使うのか、わが家と違うなあと思ったものである。
長年お付き合いしているうちに先生の癖も判って来た。先生のご機嫌麗しい時には鼻歌が出る。面白い癖だと感じたものである。
経営アカデミーの財務管理コースのコーディネーターを務めた先生のお陰で、早稲田大学の青木茂雄教授、助教授であった石塚博司氏、一橋大の番場嘉一郎先生や松本雅男先生等の面識を得た。
経営分析とりわけ損益分岐点分析で名を知られた東北大学の国弘員人教授は講師の御一人である。大のリポビタン信奉者で講演の前には必ず飲まれる。事務局員は国弘先生をいつの間にか「リポビタン先生」と綽名した。

国弘員人先生と

乾杯の音頭をとる諸井先生

諸井先生には個人的にもお世話をかけた。ある時私はおだてに乗って出版記念会を持った。先生には開催の発起人を引き受けて頂きさらに乾杯の音頭をとっていただいた。先生は私の若かりし頃のエピソード等を披露され会場右奥は味の素歌田勝弘会長の笑いを誘った。
学問以外趣味が無かった学者然とした先生であるが、50 歳を過ぎて初めて車の免許を取得した。思い返すとこの頃は先生の話す話題のすべてが車中心であった。
ドライバーの心理で車に乗ると当然人を乗せたくなるものらしい。先生は恐らくご家族にさえ敬遠されたのであろう。私にドライブに行こうと電話が入った。
周りから危ないからよせよと忠告されたが、お付き合いで伊豆方面のドライブに同行した。出がけに家内から気をつけてと言われたが気をつけようがない立場である。先生は鼻歌混じりでご機嫌である。この時ドライブインでフルーツパフエをご馳走になったことを不意に思い出した。
先生は戦時中海軍主計大尉であったそうだ。海がお好きで伊豆の下田で、独り沖合遥かまでボートをこ

ぎ出し、おおいに気をもんだこともあった。
東大で定年を迎えられ退官記念の最終講義に招かれて学士会館で昼食をご一緒した。ゼミ生たちから高性能のカメラを記念にもらったよと嬉しそうに披露されご機嫌な様子であった。
私は車で地方の風物を撮影するのもたのしいですねと話した。間もなく人伝に先生は暇が出来るとカメラを持って地方へ出かけ蝶々を追いかけているという噂が耳に入った。
諸井先生は東大で若杉敬明教授をはじめ多くの優れた学者を世に送り出した。原価管理論が専門であったが後に投資や資金調達に強い関心を抱き、これからは経営財務論が企業研究の中心になると目を輝かせていた。

左津曲直躬先生と右住友電工川上哲郎社長

諸井先生は東大経済学部に多額の寄付をされた。その基金を使って津曲先生がアメリカへ留学された。憧れのアメリカで研究できると破顔一笑された津曲先生の嬉しそうなお顔が忘れられない。
日本のマーケティング研究の草分けと言っていいだろうか大阪大学経済学部の大沢豊教授には公私ともに随分お世話をおかけした。先生には学者仲間の方々を沢山紹介して頂いている。先生は学者で最も身長が高かったのではないかと思うが、１メートル８０を優に超える大男であった。背の高い先生をアメリカ出張の折、空港で偶然見つけお互い驚いたことがあった。先生と馬が合っていた一橋大学の田内幸一教授は、豪快な方で話が面白く、新製品好きでおそらく今の洗浄機付きの便座を家庭に入れたのは、本人曰く自分が最初ではないかと言っていた。客がトイレを使用し床がびしょ濡れになったなど、使用した人の失敗談を面白おかしく語っていた。田内先生は気難しい東大の林周二先生と親しく銀座のバーでの逸話など、林先生の物まねをして周りを笑いの渦にしたものである。

大澤豊先生

大沢先生は東大の宮下藤太郎先生とは特に親しくしていた。ある時軽井沢のゴルフ場７２に誘われ三人でゴルフの腕を競いあった。二人から納得のいくハンディをもらいスタートしたが、この時に限って自分でも信じられない無残なスコアーをたたいてしまった。
二人に信州味噌の大樽を進呈する羽目となりすっかり意気消沈していた時、先生たちは気持ちよさそうに「こんなスコアーならゴルフをする資格はないな」とからかうのである。
私は頭に血が上り「資格無いなら只今限りゴルフを止めます」と啖呵を切った。以来大好きなゴルフとは、ぷっつり縁を切って今日に至っている。
因みに私のベストスコアーは４６，いつもは５０前後で回っていたが、この時は８０をたたいていた。
お二人は以後私の前ではゴルフの話は一切しなくなった。多少はゴルフを止めさせた責任を感じていたのかもしれない。

大沢先生はトヨタ自動車の販売部門のアドバイザーの任にあった時代がある。トヨタのスポーツカーに乗っていた。スピード狂なのか普段慎重なのに大阪から東名を飛ばし何時間で着いたとよく話しているのを聞いている。

前左大沢・右田内両先生

また美味いものには目がなくどこへでも出かけた。アユの時期には大阪から新潟の魚野川や利根川の簗場などへ向かい、信州の鯉こくがうまいと聞くとわざわざ佐久の花月という鯉料理の有名店へ連れられて行ったこともある。大阪で会議があって出張するとよく美味しいものをご馳走になったものである。

普段優しく人触りのいい先生だがこと自身の専門分野に私などがうっかり口を挟もうならこっぴどく叱られた。学問には極めて厳しい先生であった。思い返すと私はさまざまな場面で生意気な口をきいてきたが学問の世界に立ち入る愚を犯したことはまことに少ない。学者と接していて自然と身についた私の護身術とでもいえようか。

大沢先生の研究仲間に慶応大学の村田昭二教授がおられた。見かけも実際もまことにスマートな都会的な方で、話が上手なのでつい誰もが先生の話術に引きずりこまれたものである。後にテレビのコメンテーターとして大いに弁舌を振るわれた。

左村田昭二先生と

村田先生は生産性本部の講演謝金を封も切らずに挨拶に来たゼミ卒業生に結婚祝いだと言って渡してしまい事務局員が領収書を書いてくれと村田先生に泣きついたこともあった。

気難しい神戸大学の荒川教授も大沢先生の学問仲間でよく論争していた。大阪大学で忘れてはならない先生は横山保教授である。学界では横山３兄弟と言われ兄弟３人とも学者であった。実弟は北大の教授で当時北海道の有珠山が噴火し連日テレビが伝えていたが、この時画面で毎回解説していた地質学者である。